

群馬県前橋市

天 神 風 呂 M 地 点 遺 跡

—市道 00-360 号線(大胡 110 号線)道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2
0
1
9

2019. 3

前 橋 市 教 育 委 員 会

群馬県前橋市

天神風呂 M 地点 遺跡

—市道 00-360 号線(大胡 110 号線)道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2019. 3

前橋市教育委員会

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国を中心として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王庵寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する天神風呂M地点遺跡は、縄文時代から平安時代に至る集落が確認された天神風呂遺跡の南側に近接しており、市道の築造に伴って発掘調査を行いました。今回の調査では、古墳時代の住居跡や掘立柱建物等が検出され、古くから人々が生活した状況をうかがうことができました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成31年3月

前橋市教育委員会

教育長 塩崎政江

例 言

1. 本書は、市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造に伴う天神風呂 M 地点遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2. 発掘調査は前橋市（東部建設事務所）の委託を受け、前橋市教育委員会文化財保護課の指導のもと、山下工業株式会社（代表取締役 山下 尚）が実施し、その費用については前橋市が全額負担した。

3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地	群馬県前橋市茂木町 239-18 ほか
遺跡略称	30110
遺跡番号	0191
調査面積	177m ²
期間 【現地調査】	平成 30 年 12 月 14 日～平成 30 年 12 月 27 日
【整理作業】	平成 30 年 12 月 28 日～平成 31 年 3 月 15 日
調査担当者	青木 利文（山下工業株式会社 文化財事業部 調査技術員）
調査監督員	並木 史一（前橋市教育委員会事務局 文化財保護課 埋蔵文化財係 副主幹）

4. 整理作業及び本書作成は青木を中心に石塚 久則 川邊 みづき 城 ゆかり 谷藤 龍太郎（山下工業株式会社）が行った。

5. 遺構図作成は田中 隆明（タナカ設計）が行った。

6. 本書の執筆については I 章を並木、II 章を石塚、III 章・IV 章・V 章を青木が行った。

7. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。

8. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の諸氏からご助言・ご協力を賜った。（敬称略）

小島 純一 山崎 芳春

凡 例

1. 遺跡、全体図における X・Y 値は、平面直角座標 IX 系（世界測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。

2. 本報告書で用いる座標値は、全て世界測地系測地成果 2011 である。

3. 遺物注記で用いる遺構等の略称は以下のとおりである。

【堅穴建物】・・H 【掘立柱建物】・・B 【堅穴遺構】・・T 【溝】・・W

4. 土層における含有物量は、多量(50～30%)・中量(25～15%)・少量(10～5%)・微量(1～3%)と表記した。

5. 本報告書で用いる遺跡地図・遺構図・遺物実測図等の縮尺はすべてにスケールを表示した。

6. 本書掲載の第 1・17 図は前橋市発行の 1/2,500 「前橋市地形図」、第 2 図は国土地理院発行 1/25,000 地形図を用いそれぞれ一部改変・引用した。

7. 土器の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修（2011）を用いた。

目 次

はじめに

例言

凡例

目次

目次

第Ⅰ章	調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	周辺の地形と遺跡	2
第Ⅲ章	調査の概要	3
第Ⅳ章	確認された遺構と遺物	5
第Ⅴ章	まとめ	12

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	遺跡位置図	1	第 11 図	T - 1 出土遺物	9
第 2 図	周辺遺跡の位置図	2	第 12 図	B - 1 平面・断面図	10
第 3 図	基本層序	3	第 13 図	B - 1 出土遺物	10
第 4 図	遺跡全体図	4	第 14 図	W - 1・W - 2 平面・断面図	11
第 5 図	H - 1 平面・断面図	5	第 15 図	P - 7 出土遺物	11
第 6 図	H - 1 出土遺物	6	第 16 図	調査区一括遺物	12
第 7 図	H - 2・H - 3 平面・断面図	7	第 17 図	天神風呂遺跡群の各調査地点位置	13
第 8 図	H - 2・H - 3 ピット断面図	8	第 18 図	参考資料	13
第 9 図	H - 2・H - 3 出土遺物	8			
第 10 図	T - 1 平面・断面図	9			

表目次

第 1 表	作業経過	3	第 6 表	ピット計測表	11
第 2 表	H - 1 出土遺物観察表	6	第 7 表	P - 7 出土遺物観察表	11
第 3 表	H - 2・H - 3 出土遺物観察表	8	第 8 表	調査区一括遺物観察表	12
第 4 表	T - 1 出土遺物観察表	9	第 9 表	天神風呂遺跡群の時期	13
第 5 表	B - 1 出土遺物観察表	11			

写真図版目次

図 版 1	1. 調査区全景 北から	図 版 3	出土遺物(H - 1、H - 2・H - 3)
	2. 調査区全景 南から	図 版 4	出土遺物(H - 2・H - 3、T - 1、B - 1 P - 7、調査区一括)
図 版 2	1. 竪穴建物の切り合い 西から		
	2. H - 1 完掘 西から		
	3. H - 1 カマド遺物出土状況 東から		
	4. H - 1 カマド 掘方 西から		
	5. H - 2・H - 3 完掘 東から		
	6. H - 2・H - 3 掘方 完掘 西から		
	7. B - 1 全景 西から		
	8. 調査埋め戻し 転圧作業		

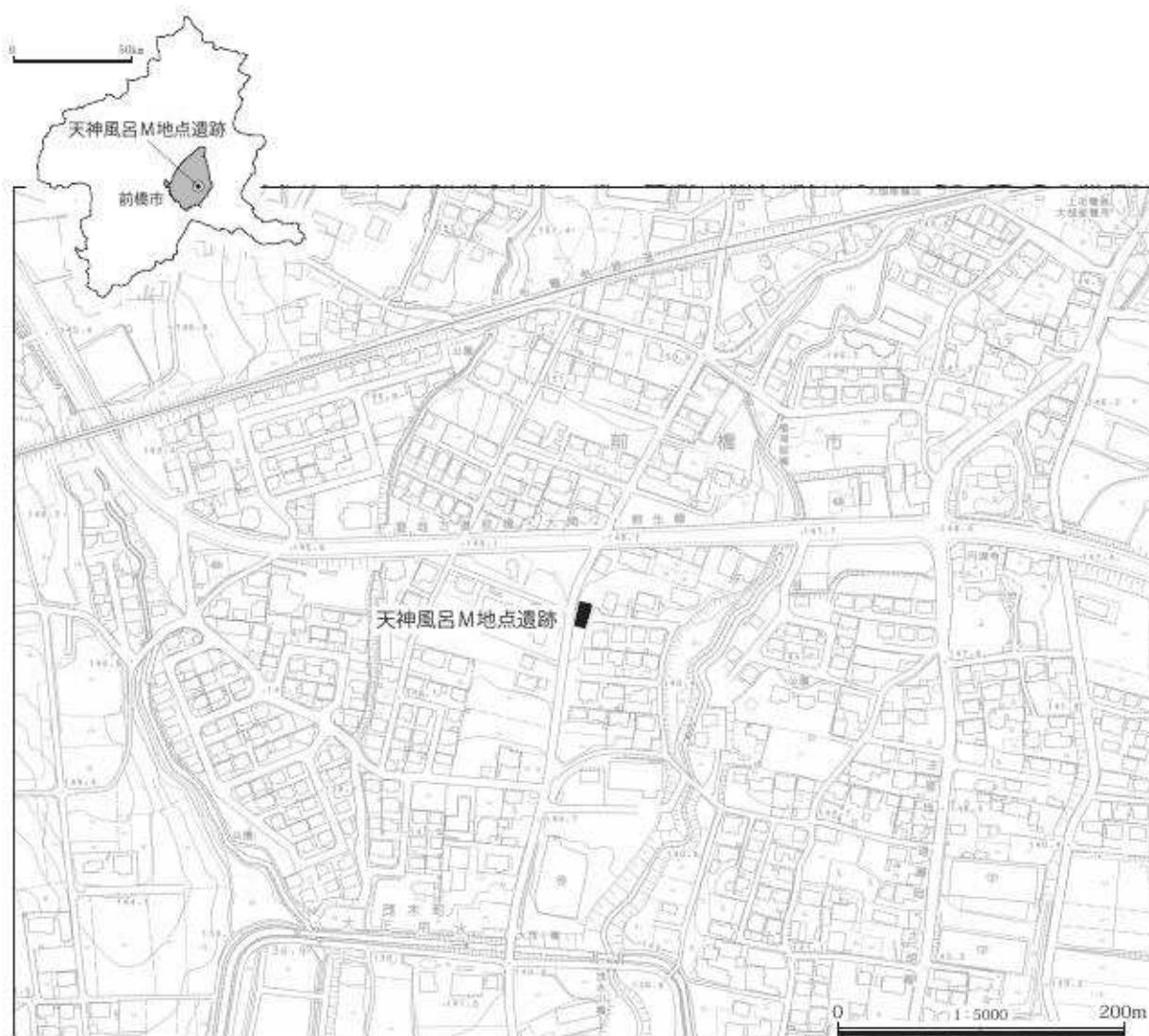
第Ⅰ章 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造にあたり、平成 30 年 9 月 11 日付で前橋市長 山本 龍（東部建設事務所）（以下「前橋市」という。）より試掘確認調査依頼が提出された。これを受け、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）で同年 10 月 19 日に試掘確認調査を実施した結果、竪穴住居跡などが検出され、工事計画から遺構の現状保存は困難であると判断したため、記録保存を目的とした発掘調査実施に向けて協議を進めた。

平成 30 年 11 月 1 日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年 12 月 3 日付で前橋市と民間調査組織である山下工業株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「天神風呂 M 地点遺跡」（遺跡コード：30I10）の「天神風呂」は近接地点でこれまで実施した発掘調査の遺跡名を採用し、「M 地点」は過年に実施した調査と区別するために付したものである。



第 1 図 遺跡位置図

第Ⅱ章 周辺の地形と遺跡

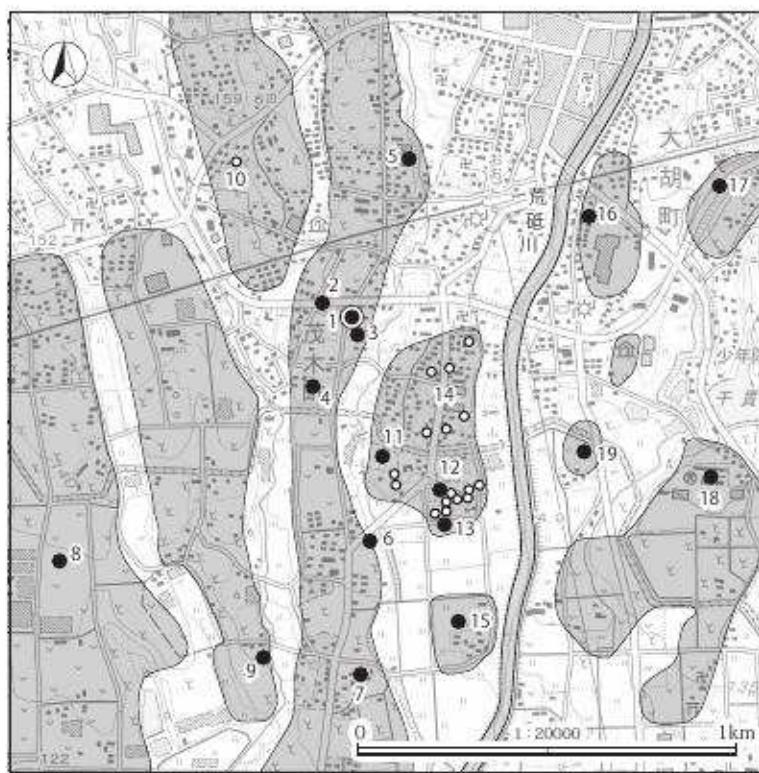
1. 遺跡の位置

前橋市の大胡地区は前橋市街から北東約9kmにある。立地は赤城山南麓で、平地部に向かって流れる中小の河川により開析された谷地形により起伏の多い地形となり、標高は120m～250mとなる。調査地点の茂木町は大胡の中心街から南西約1kmにあり、市街の中央を北から貫流する荒砥川の支流で東を流れる薬師川と西の大泉坊川に挟まれ、両側の低地部には小規模で帶状の水田地帯が続く。現況は北側に県道3号線(通称大胡県道)、南東は住宅地となっている。

2. 周辺の遺跡

本遺跡の周辺は開発に伴う小規模な発掘調査が進み、旧石器時代から中世・近世までの遺跡が確認されている。旧石器時代の遺跡は三ツ屋遺跡(6)で相沢忠洋が発掘調査した遺跡として有名である。天神風呂遺跡(2)(大胡バイパス)は縄文時代の集落、鬼高期～国分期の集落が調査されている。さらに周辺開発に伴い天神風呂H・I・E・F地点遺跡(3・4)の調査が実施され、台地全面に遺跡が広がる状況が確認されている。上大屋・樋越地区遺跡群(17)は縄文時代集落の他、八ヶ峰生産址遺構からは奈良時代の須恵器窯跡や炭窯や製鉄跡が出土している。茂木古墳群(14)は上ノ山古墳(12)を中心に古墳時代後期を中心とした大規模な古墳群である。堀越古墳(10)は終末期の円墳で、主体部には切石切組式の高度な横穴式石室を構築している。学史的には、昭和32年に群馬大学史学研究室により鎌倉時代末の茂木古墓(13)が調査されている。特に注目されることとは天神風呂遺跡群では瓦塔片が複数確認されていることや、天神風呂F地点(4)から復元可能な淨瓶(第18図)が出土していることで、本遺跡周辺に古代官衙遺構の存在が推定される。

- 1 天神風呂M地点遺跡
- 2 天神風呂遺跡（大胡バイパス）
- 3 天神風呂H・I地点遺跡
- 4 天神風呂E・F地点遺跡
- 5 茂木天神遺跡
- 6 三ツ屋遺跡
- 7 大畠遺跡
- 8 足軽グランド遺跡
- 9 稲荷窪遺跡
- 10 堀越古墳
- 11 西小路遺跡
- 12 上ノ山遺跡
- 13 茂木古墓
- 14 茂木古墳群
- 15 茂木山ノ前遺跡
- 16 中宮関遺跡
- 17 上大屋・樋越地区遺跡群
- 18 前橋東商業高等学校遺跡
- 19 下宮関遺跡



第2図 周辺遺跡の位置図

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

本遺跡周辺は宅地化されているため、上水道設備、建物基礎跡などが多くあり、試掘の結果により遺構が破壊されていない集中箇所が調査対象(177m²)となった。調査対象地は南東にある住宅団地に係わる生活道路の出入口であるため、住民への周知及び迂回路の案内看板を設置した。また、調査中は調査区全体に安全柵を設置し、保安灯を点灯した。遺構調査は、I層(碎石)およびII層(造成土)を重機により除去し、その後、人力による遺構確認を行った。遺構確認の結果は調査区北部に竪穴建物、南部には溝や掘立柱建物などが確認できた。遺構掘削はジョレンやスコップ、移植ごてを用い半裁やベルトを残して掘削を進めた。

測量に用いた座標は世界測地系を用い、X=45696 Y=-61120 を起点とし、南東に展開する4mのグリッドを設定した。遺構記録は平面図・断面図はトータルステーションと電子平板を用い作成した。H-1のカマド周辺で構築に用いられた土師器の甕が良好に確認され、これらの出土状況を記録して取り上げを行った。遺構写真は35mmモノクロ、カラーポジフィルム、およびデジタルカメラを使用した。遺構掘削完了後には高所より、南北方向からの全景写真撮影を行った。

調査終了後は再び生活道路として使用されるため、埋め戻しは30cm毎の締め固め転圧を行い、遺構の掘削を行った箇所はランマ転圧を行い、全体はローラーを用いた。

2. 調査の経過

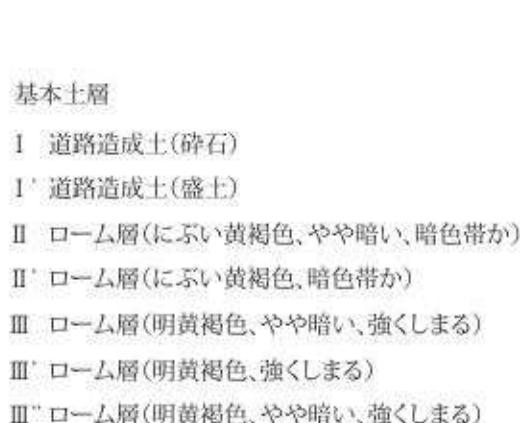
調査期間は平成30年12月14日～同月27日まで実施した。詳細は下記の表に示した。

第1表 作業経過

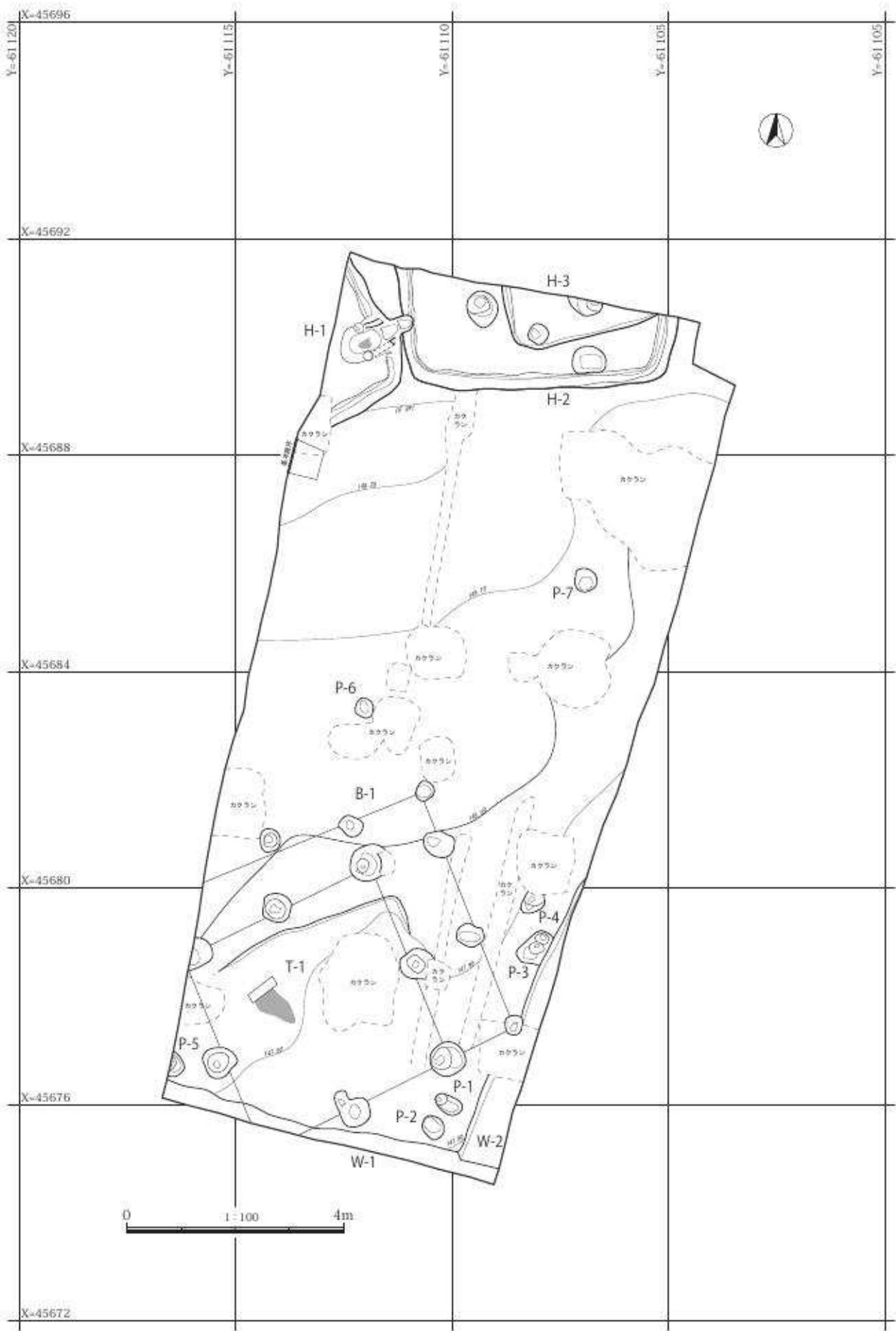
作業内容	12月															
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
看板・安全柵		■														
表土掘削		■														
遺構確認			■													
遺構掘削				■												
遺構記録					■											
清掃・全景撮影						■										
完了立合い												■				
埋め戻し										■		■				
跡片付け										■		■				

2. 調査区の地形と基本層序

本遺跡の西側は現道路であるため、造成により確認面までは約60～70cmであるのに対し、東側は約10cm弱であり非常に薄い。遺構確認面はII層の上面で、北西隅から南東方向に傾斜しており、高低差は50cm程となる。II層以下はローム層となる。II層はにぶい黄褐色でIII層に比べやや暗い。2つの層を含め、層上位にAs-YPなど確認できないことから暗色帯と考えられ、造成などによりロームが削平されたことが想定される。



第3図 基本層序

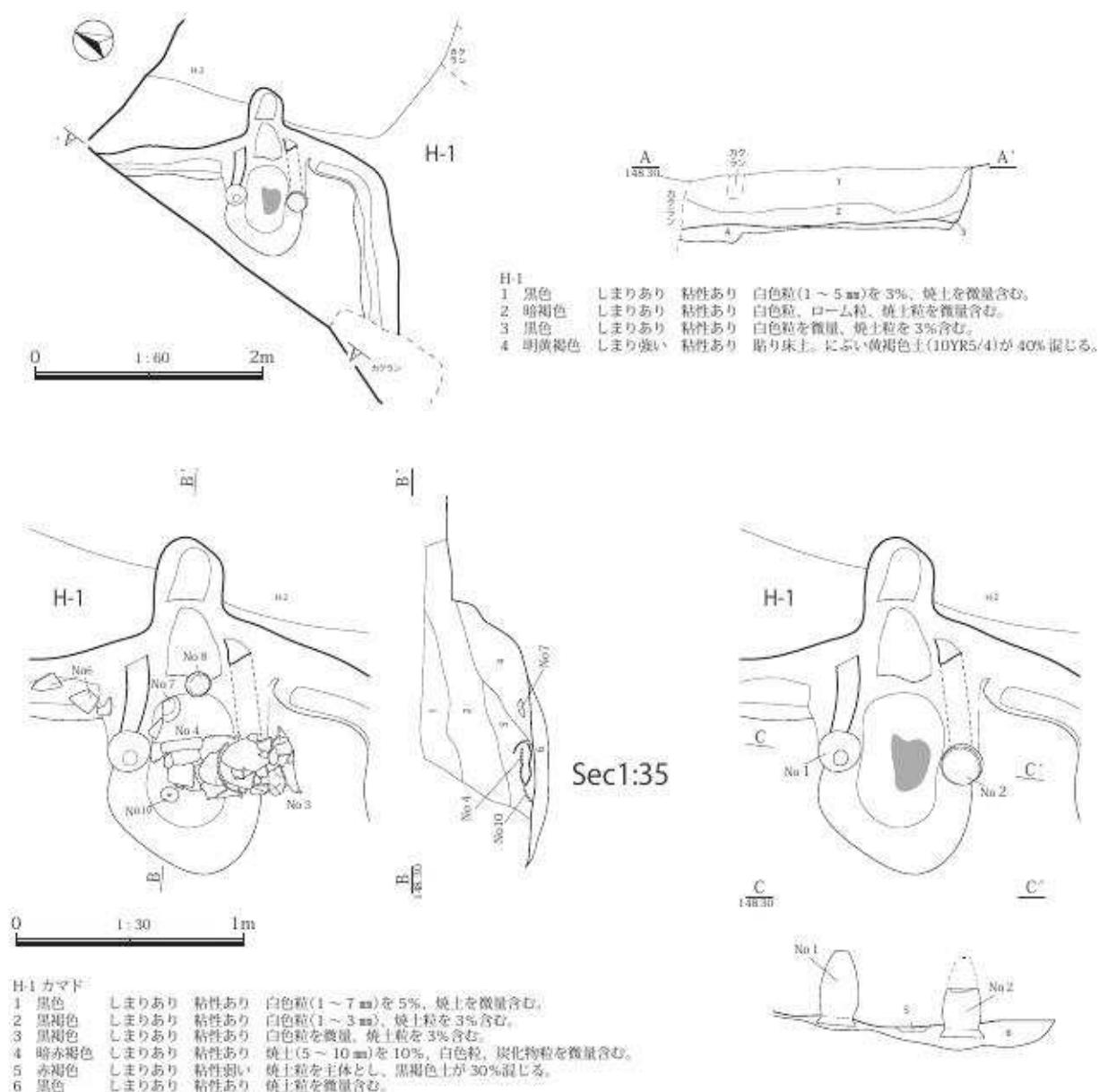


第4図 遺跡全体図

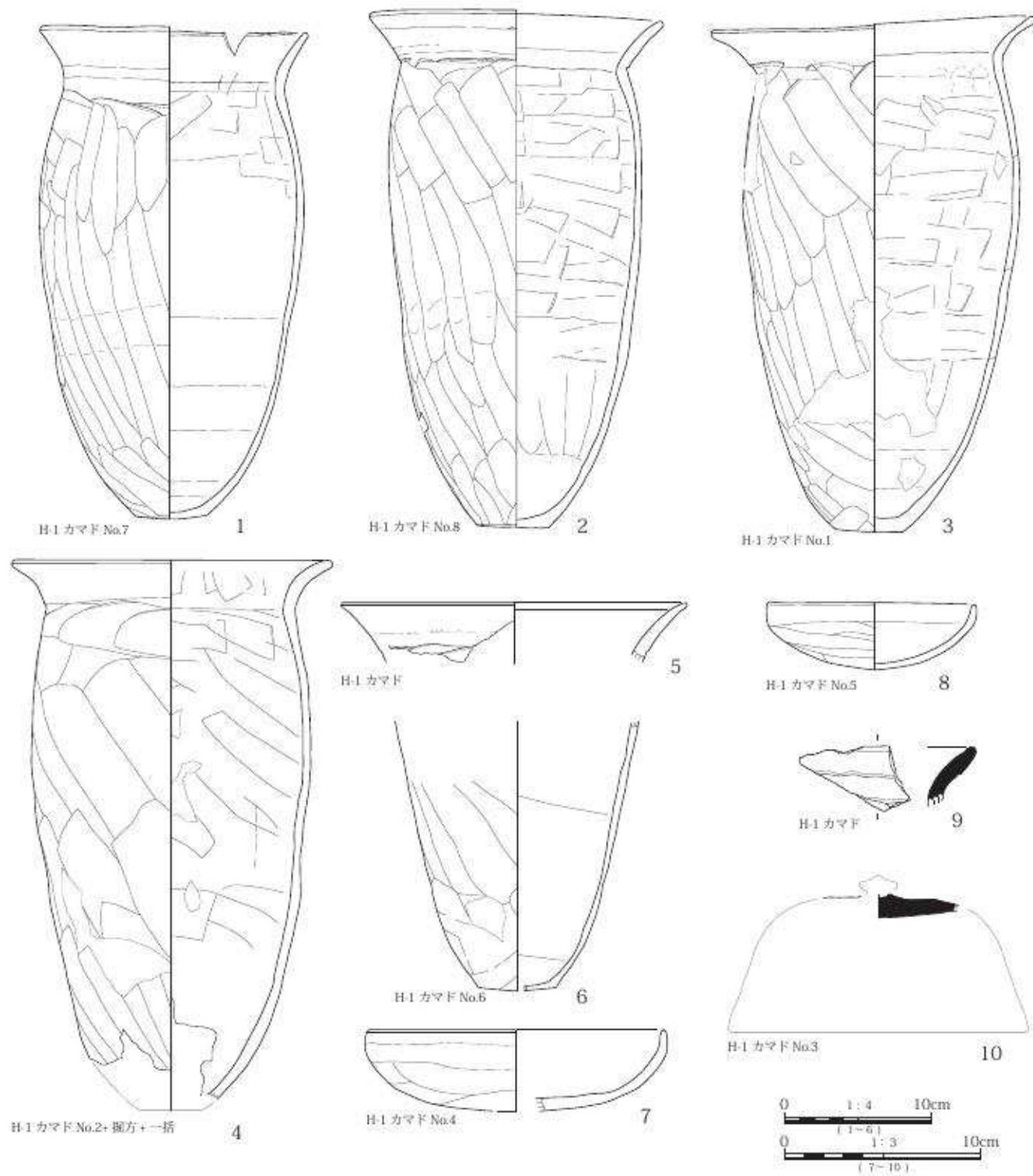
第IV章 確認された遺構と遺物

H - 1

本遺構は調査区の北面隅にある。遺構の北から西にかけては一部が調査区外となる。主軸はN-65°-Eで、規模は残存値で南北が2.5m、東西が2.25m、壁高は50cmとなる。なお南西部は搅乱となる。本遺構の北東部にあるH - 2を切っている。ピットおよび貯蔵穴は確認されていない。床面は貼り床となっており、壁周溝がめぐらしているものと考えられる。カマドは東壁の南寄りに付設されており、4点の長胴甕と黒褐色土により構築されている。両袖の先端にそれぞれ甕を逆さに立て(1・2)、さらに2点の甕を横に重ねて(3・4。口縁部は右向き)袖端の甕に乗せて焚口部を構築したものと考えられる。カマドの全長は107cm、焚口部幅は35cm。焚口部の底面はやや窪み、燃焼部底面には一部焼土が見られる。出土遺物は、カマドの構築材として利用された長胴甕(1・2・3・4)、ほか、カマド内部からは土師器环(7・8)などがある。出土遺物の特徴から7世紀後半の遺構跡と考えられる。



第5図 H - 1 平面・断面図



第6図 H-1出土遺物

第2表 H-1出土遺物観察表

No.	出土位置	種別	器種	部位	口径・底径・器高(cm)	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	カマド	土師器	長胴甕	完形	18.2・4.9・33.4	良好	に赤い 模	砂粒含む	外面体部タテヘラケズリ。内面ヨコ ヘラナデ。	カマド構築材、袖左。 内面器壁荒れ。
2	カマド	土師器	長胴甕	完形	20.0・5.0・35.2	良好	淡黄橙	長石石英雲母	外面体部ナナメヘラケズリ。内面ヨ コヘラナデ。	カマド構築材、袖右。
3	カマド	土師器	長胴甕	完形	22.1・4.6・34.5	良好	淡橙	白色軽石	外面体部ナナメヘラケズリ。内面ヨコ ヘラナデ。	カマド構築材、上部 右。
4	カマド	土師器	長胴甕	口縁 ～胴部	21.8・—・(36.8)	良好	橙	石英雲母 砂粒含 む	外面口縁ヨコナデ 体部ナナメヘラケ ズリ。内面ヨコナデ。	カマド構築材、上部 左。底部欠損。

()残存値

No.	出土位置	種別	器種	部位	口径・底径・器高(cm)	焼成	色調	胎土	調整	備考
5	カマド	土師器	長胴甕	口縁部	〈23.5〉・—・(4.0)	普通	にぶい 橙	砂粒 赤色粘土粒	外面 口縁ヨコナデ 脇部ヘラケズリ。 内面ヨコナデ。	残存 1/5。
6	カマド	土師器	長胴甕	胴～底部	—・〈5.4〉・(18.3)	普通	灰白	砂粒含む	外面 ナナメヘラケズリ。内面 丁寧な ヨコヘラケズリ。	
7	カマド	土師器	甕	口縁～底部	〈15.4〉・—・(4.2)	普通	にぶい 橙	砂粒含む	外面 口縁丁寧なヨコナデ。内面 丁寧な ナデ。	
8	カマド	土師器	甕	完形	10.9・—・3.5	良好	橙	砂粒含む	外面 口縁ヨコナデ 底部丁寧なヘラケ ズリ。内面 丁寧なナデ。	
9	カマド	須恵器	小型甕	口縁部	—・—・(2.8)	良好	灰	長石	外面 2条横波状文。内面 ヨコナデ。	
10	カマド	須恵器	蓋	天井部	〈天井 8.0〉・—・(1.2)	良好	淡橙	良好	外面 回転ヘラケズリ。内面 丁寧な回 転ナデ。	調査区一括 No. 7 と 接合か?

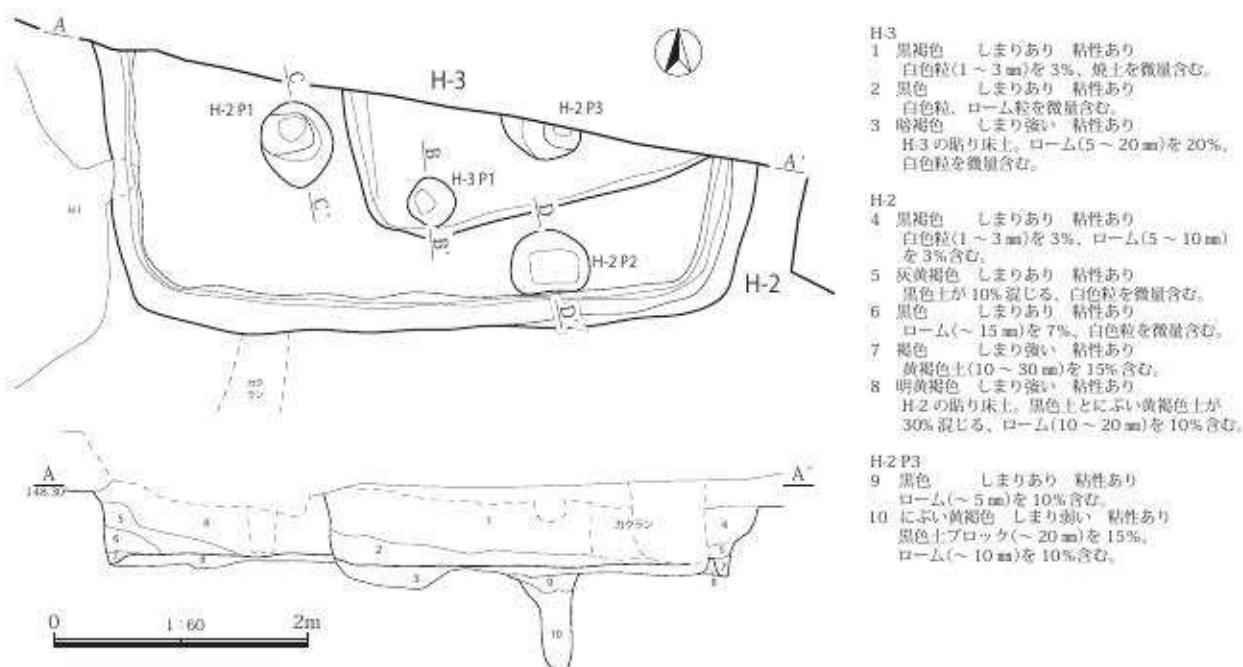
〈 〉推定値 () 残存値

H - 2・H - 3

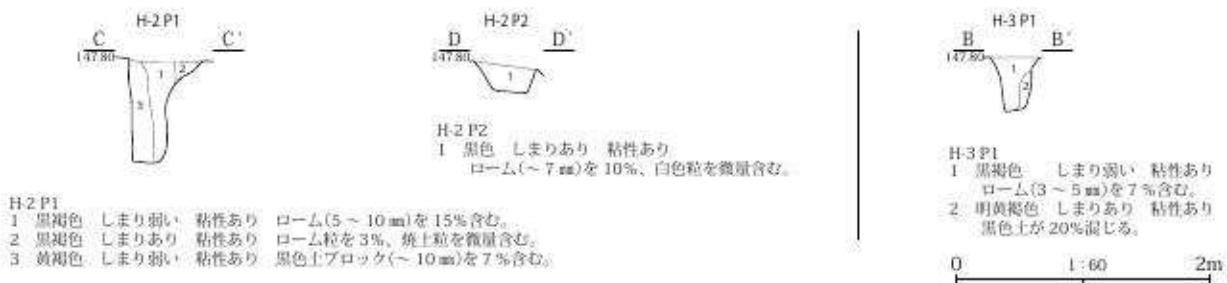
H - 2 および H - 3 は調査区の北にあり、遺構の北部はともに調査区外となる。遺構掘削の際は 1 軒の竪穴建物とみなし掘削を行ったが、床面の検出により 2 軒の竪穴建物が切り合ったものとして確認できた。両遺構の覆土から出土した遺物はほとんどが破片資料であり、出土位置の記録を行っていないため、双方の遺物が混在しているものと考えられる。しかしながら両遺構が把握された段階で確認されたピット出土の遺物はそれぞれ出土した遺構で取り上げている。

H - 2 は H - 3 に切られた古い竪穴建物となる。遺構の北部の大半が調査区外となり全体が把握できないが、軸方向は N-87°-E で、規模は東西が 5.05 m、南北は残存値で 2.3 m、壁高は 50cm となる。遺構の西は H - 1 に切られている。ピットは 3カ所確認でき、このうち P 1 と P 3 は 80cm ほどの深さがあり建物の柱穴とみられる。なお P 3 は H - 3 の貼り床層の下から確認されている。床面は貼り床となっており、外周は壁周溝がめぐる。

H - 3 は H - 2 を切る新しい竪穴建物である。遺構の北部の大半が H - 2 と同様に調査区外となり全体が把握できないが、軸方向は N-15°-E、規模は残存値で東西が 2.75 m、南北が 1.25 m、壁高は 62cm となる。ピットは南西隅に P 1 がある。床面は貼り床があり、壁周溝はない。



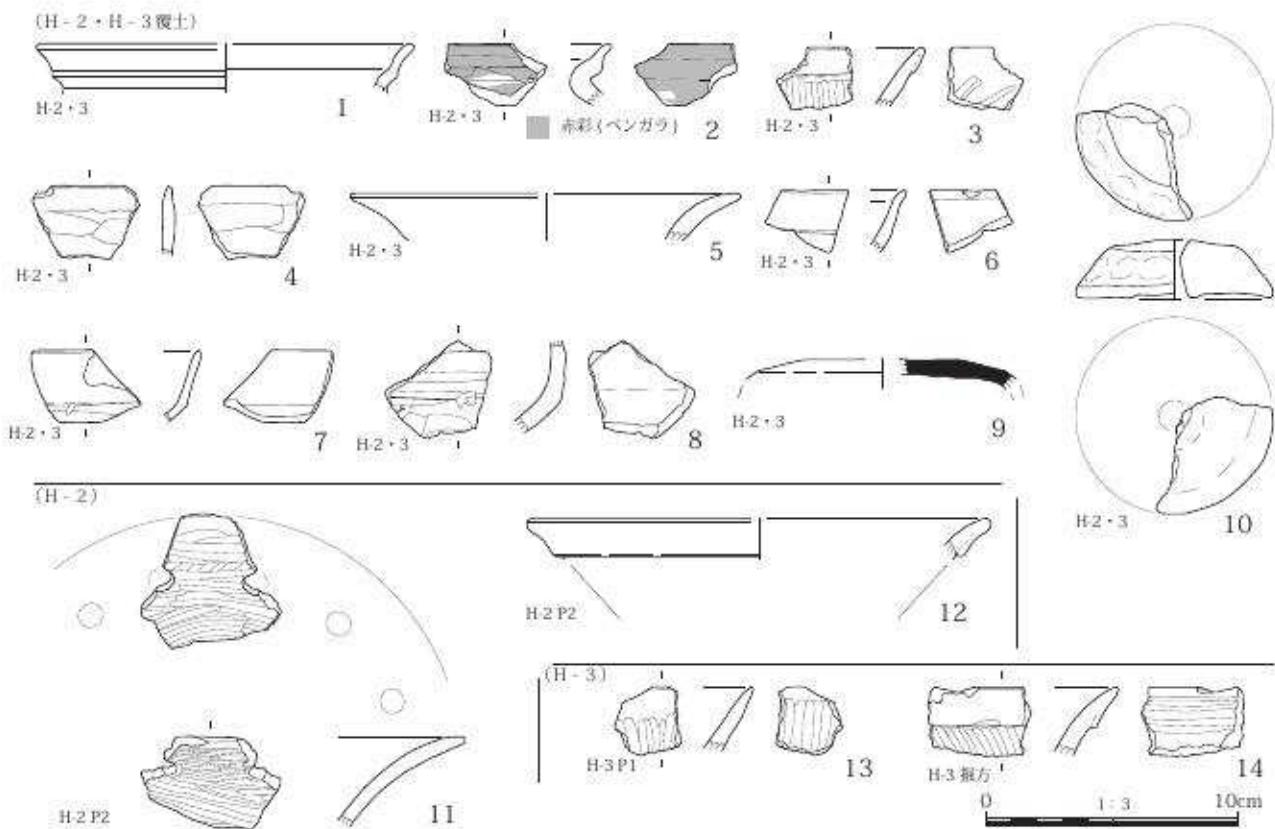
第7図 H - 2・H - 3 平面・断面図



第8図 H-2・H-3 ピット断面図

遺物はすべて破片資料である。覆土出土の遺物は両遺構の遺物が混在しているものと考えられるが、S字縫(1・2)、折り返しを持つ口縁部(3)などの古墳時代前期の遺物と、土師器の長胴縫の口縁部(5)、胴部に稜を持つ壺(6・8)、須恵器の蓋(9)などの古墳時代後期の遺物からなる。なお、遺構確定後のH-2 P2では折り返しを持つ口縁部(12)、穿孔のある特殊器台(11)が出土し、H-3 P1ではミガキのある口縁部(13)、H-3の掘方からは折り返しを持つ口縁部(14)が出土している。

両住居の年代は覆土遺物が帰属不明な点や、破片資料のみであることから不明瞭な点もあるが、古い遺構となるH-2は古墳時代前期、新しい遺構はH-3で古墳時代後期と考えられる。なおH-3のP1や掘方から出土した遺物は古墳時代前期の遺物とみられるが、これらはH-2からの混入遺物と考えられる。



第9図 H-2・H-3 出土遺物

第3表 H-2・H-3 出土遺物観察表

No.	出土位置	種別	器種	部位	口径・底径・高さ(mm)	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	H-2・3 覆土	土師器	台付甕	口縁部	<15.0>・—・(2.0)	良好	にぶい 黄褐	白色粘土含む	内外面丁寧なヨコナデ。	S字状口縁甕形土器。 残存1/10。
2	H-2・3 覆土	土師器	台付甕	口縁部 片	—・—・(2.4)	良好	明褐灰	精製	内外面丁寧なヨコナデ。	S字状口縁甕形土器。 赤彩(ベンガラ)。破片縦2.5横4.0。
3	H-2・3 覆土	土師器	小型甕	口縁部 片	計測不可	良好	灰褐	砂粒含む	貼付状口縁。頸部縦棒状ヘラミガキ。	口縁部折り返し。縦3.0横3.0

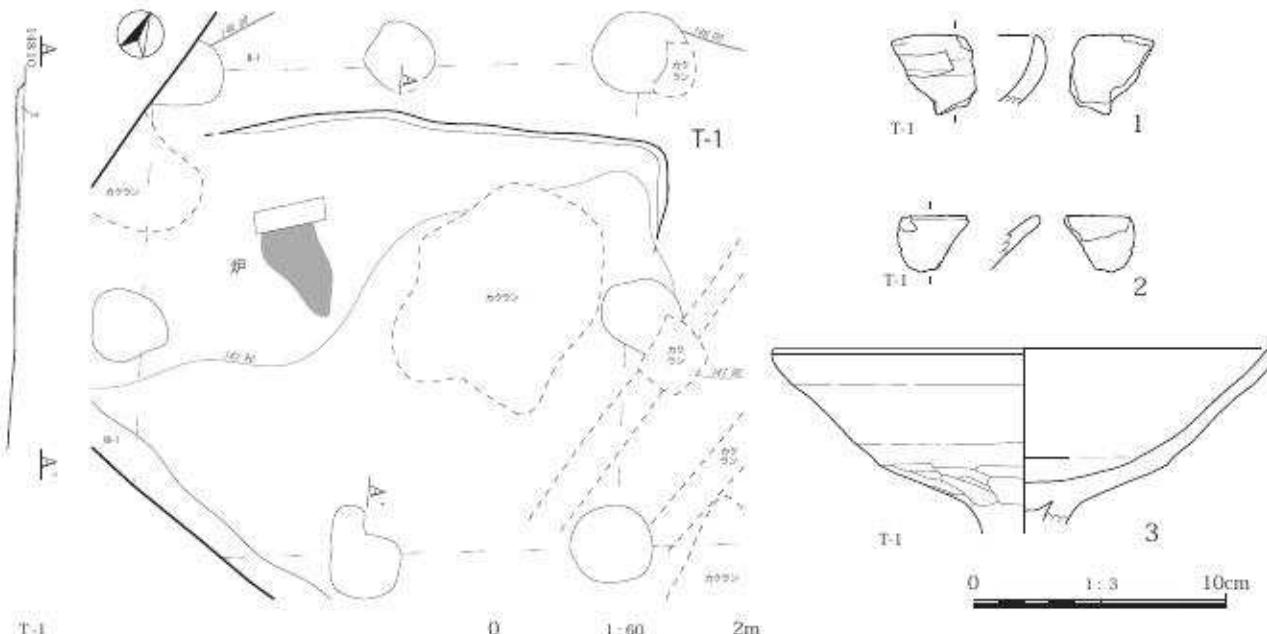
()推定値 ()残存値

No.	出土位置	種別	器種	部位	口径・底径・器高(cm)	焼成	色調	胎土	調整	備考
4	H-2+3 慶土	土師器	鉢	口縁部	計測不可	普通	明褐色	長石	外面 体部へラケズリ。内面 ヨコナデ。	外面煤付着。破片縦3.0 横4.2。
5	H-2+3 慶土	土師器	製陶窯	口縁部	〈20.8〉×—×(2.5)	良好	橙	赤色粘土粒 白色 軽石粒	内外面 丁寧なヨコナデ。	残存1/10。
6	H-2+3 慶土	土師器	坪	口縁部	—×—×(2.5)	良好	褐灰	良好	外面 口縁ヨコナデ。体部へラケズリ 内面ヨコナデ。	黒色強い。破片縦2.7 横3.4。
7	H-2+3 慶土	土師器	坪	口縁部	—×—×(2.8)	良好	橙	精製	外面 口縁ヨコナデ。体部へラケズリ 内面ヨコナデ。	模倣坪。
8	H-2+3 慶土	土師器	坪	环体部	—×—×(3.8)	良好	灰黄褐	白色軽石粒	外形容ヨコナデ 体部へラケズリ 内面 丁寧なヨコナデ	黒色強い。破片縦4.3 横4.5。
9	H-2+3 慶土	須恵器	环盛	天井部	〈天井径3.1〉	不良 (燒締 甘い)	灰	長石白色軽石粒	外面 天井部回転へラケズリ。内面粗 い回転クロロ目。	残存1/2。
10	H-2+3 慶土	土製品	筋鍔車		〈5.2〉×—×(1.5)	良好	赤橙	白色軽石含む	外面 ユビナデ。	断面にぶい黄褐色。 残存1/4、重量10%。
11	H-2 P-2	土師器	器台	口縁部	〈8.5〉×—×(3.5)	良好	灰白	砂粒含む	内外面 ヘラミガキ。	特殊器台。透孔 10ヶ以上と推定。
12	H-2 P-2	土師器	鉢	口縁部	〈18.3〉×—×(1.6)	良好	橙	砂粒を含む	内外面とも丁寧なヨコナデ。	口縁部折り返し。器 種不明。
13	H-3 P-1	土師器	高环	口縁部	計測不可	良好	灰	砂粒含む	内外面 棒状ヘラミガキ。	細い口縁端部。破片 縦3.5 横2.5。
14	H-3 楊方	土師器	小型甕	口縁部	計測不可	良好	にぶい 橙	長石石英	外面 体部ナメ棒状ヘラミガキ。内面 棒状ヨコヘラミガキ。	折り返し口縁。破片 縦3.3 横4.0。

<>推定値 (<>)残存値

T - 1

本遺構は調査区の南にある。遺構の底面が浅いため傾斜する確認面の高い部分で掘り込みが残っていた。残存部は北辺と北東隅の一部である。軸方向はN-65°-Eで、残存は東西長軸が3.56m、南北短軸は1.91mほどである。周囲には軸の近いB-1を構成するピット群がある。また、底面には78cm×48cmの焼土の痕跡が確認できる。出土遺物は古墳時代中期の高環(3)のほか、内湾する口縁部片(1)などが確認されている。遺物が小片であり、周辺は搅乱が多く混じり込みの可能性があるため、はっきりとした時期は不明である。一方、覆土にはAs-Bを含んでおらず、古代以前の遺構と考えられる。なお、周囲をめぐるB-1とは軸方向が近いことから、B-1に伴う可能性もある。



第10図 T=1 平面・断面図

第11図 T-1 出土遺物

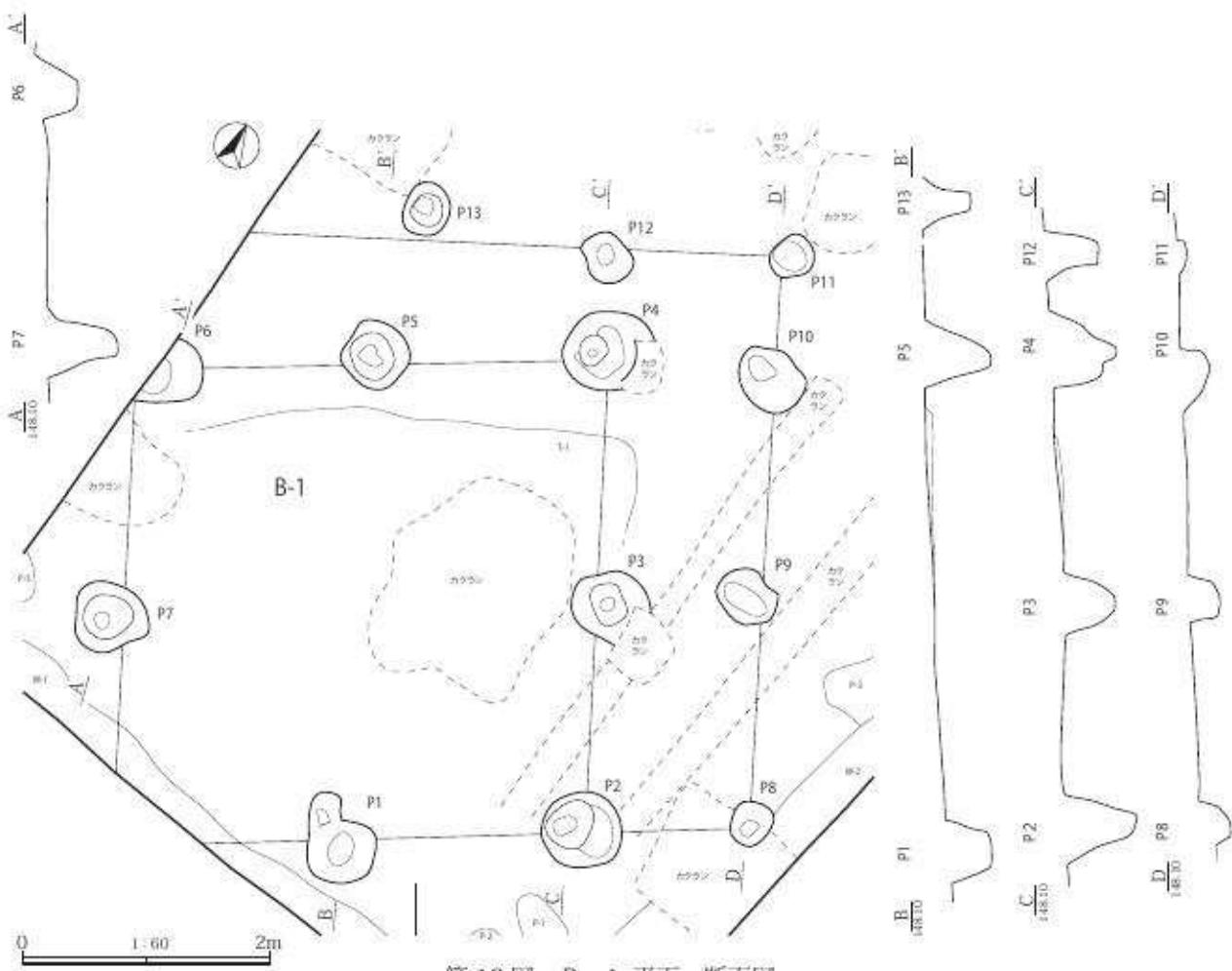
第4表 T-1 出土遺物觀察表

No.	出土位置	種別	器種	部位	口径・底径・器高(cm)	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	覆土	土師器	环	口縁部	計測不可	良好	橙	良好	内外面丁寧なヨコナテ。	残存1/12。
2	覆土	土師器	环	口縁部	- - - (2.1)	良好	灰黃褐	白色軽石粒	内外面ヨコナデ。	破片繋3.0横2.8。
3	覆土	土師器	高环	环部～ 糊上部	<20.0> - - (7.3)	良好	橙	白色軽石 赤褐色 粘土粒	外面ヨコナテ 接合部ヘラナテ。 内面丁寧なナテ。	

推定值 残存值

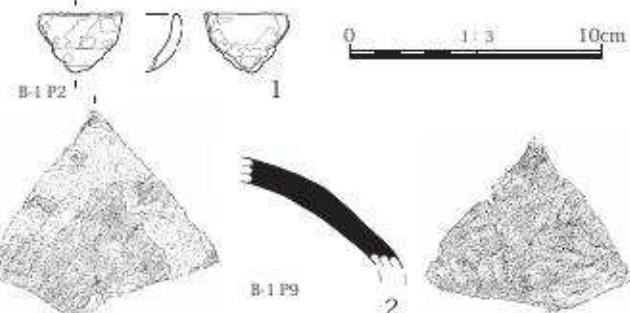
B - 1

B - 1 は調査区の南にある。遺構は 13 基のピットで構成され、 2×2 間の庇を持つ掘立柱建物である。北西は調査区外となる。主軸は N-65°E で、規模は東西 5.2m、南北 4.8m、面積は 24.96m² と推定される。身舎部は P 1 から P 7 となり南北 3.8 m、東西 3.6 m で 2×2 間のほぼ正方形状となる。各柱の間隔は平均で 1.9 m ほどとなる。庇は P 8 から P 13 で、幅は東側が 1.3 m、北側は 1 m ほどである。遺構範囲内には軸方向が同じ T - 1 があるほか、周辺には南西に W - 1、南東には W - 2 がある。なお、遺構の範囲内および周辺には所々に攪乱がある。出土遺物は P 2 から土師器壺の小片(1)が、P 9 から須恵器平瓶(2)の一部のほか、各ピットからは土師器、須恵器、縄文土器の小片がある。時期は遺物が少なく小片であるためはっきりとしないが、各ピット覆土に As-B を含んでいないことから、12 世紀以前であり古代の遺構と考えられる。



第 12 図 B - 1 平面・断面図

B-1 ピット			
P1 黒色	しまりあり	粘性あり	白色粒を微量含む。深さ 36cm。
P2 黒色	しまりあり	粘性あり	白色粒(～5mm)を 3%。ローム粒、焼上粒を微量含む。深さ 56cm。
P3 黒褐色	しまりあり	粘性あり	ローム(～7mm)を 5%。白色粒を微量含む。深さ 52cm。
P4 黒色	しまりあり	粘性あり	ローム粒を 3%、白色粒を微量含む。一部カクラン。深さ 52cm。
P5 黒色	しまりあり	粘性あり	白色粒を微量含む。深さ 50cm。
P6 黒色	しまりあり	粘性あり	白色粒を微量含む。深さ 51cm。
P7 黒色	しまりあり	粘性あり	ローム粒を 3%、白色粒を微量含む。深さ 57cm。
P8 黒色	しまりあり	粘性あり	ローム粒、白色粒を微量含む。深さ 23cm。
P9 暗褐色	しまりあり	粘性あり	ロームが 30% 見る。深さ 23cm。
P10 黒色	しまりあり	粘性あり	白色粒を微量含む、一部カクラン。深さ 21cm。
P11 暗褐色	しまりあり	粘性あり	白色粒を微量含む。深さ 13cm。
P12 黒色	しまりあり	粘性あり	ローム(～50cm)を 10%。白色粒を微量含む。深さ 43cm。
P13 黒色	しまりあり	粘性あり	白色粒を微量含む、一部カクラン。深さ 37cm。



第 13 図 B - 1 出土遺物

第5表 B-1 出土遺物観察表

No.	出土位置	種別	器種	部位	口径・底径・器高(cm)	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	P-2 覆土	土師器	壺	口縁部片	—・—(2.4)	良好	にぶい 橙	砂粒含む	内外面ヨコナデ。	煤付着。内外面剥落。 破片縦2.5 横3.2。
2	P-9 覆土	須恵器	平瓶	胴部片	—・—(3.6)	良好	灰	良好	外面 格子目印き。内面 当貝痕。	平瓶の一部か?

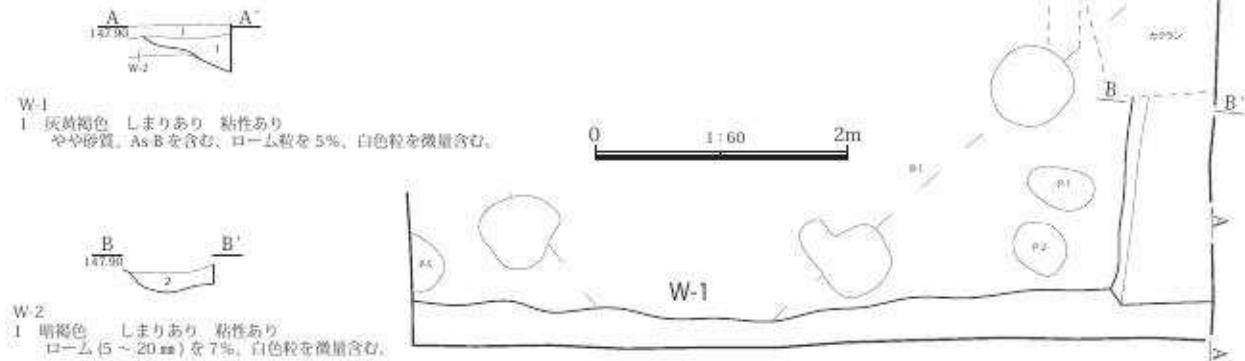
()残存値

W-1

調査区の南にある。遺構は南辺で一部が確認されたのみで、全体の形状は不明である。主軸はN-13°-Wで、残存値で東西6.3m、残存深度は30cmである。調査区の南東隅でW-2を切る。出土遺物は土師器、須恵器、縄文土器の小片があった。時期は覆土にAs-Bを含んでおり12世紀前半以降の遺構と考えられる。

W-2

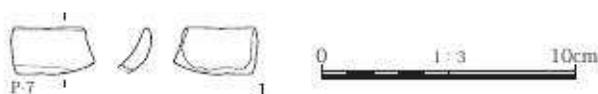
調査区の南東隅にある。遺構は南東隅で一部が確認されたのみで、全体の形状は不明である。主軸はN-64°-E、残存値は南北5.6m、深さ15cmである。調査区の東隅でW-1に切られる。出土遺物は土師器、須恵器、縄文土器の小片があった。時期は覆土にAs-Bを含んでいないため古代の遺構と考えられる。



第14図 W-1・W-2 平面・断面図

ピット

掘立柱建物を構成しないピットを単独の遺構として扱った。これらは7基あり、各データは計測表に示した。これらの時期は、覆土にAs-Bを含んでおらずおおよそB-1と同様古代の遺構と考えられる。なおP-7からは土師器の小片が1点出土した。



第15図 ピット(P-7) 出土遺物

第6表 ピット計測表

ピット名	出土位置	長軸×短軸×深度(cm)	覆土
P-1	南東隅	54×33×17	A類
P-2	南東隅	47×40×21	A類
P-3	東	74×50×39	B類
P-4	東	50×39×41	B類
P-5	南西隅	54×33×40	A類
P-6	中央	39×36×11	B類
P-7	中央	45×41×21	B類

A類 黒色 しまりあり 黏性あり 白色粒を微量含む。
B類 黑褐色 しまりあり 黏性あり ローム(～5mm)
を3%、白色粒を微量含む。

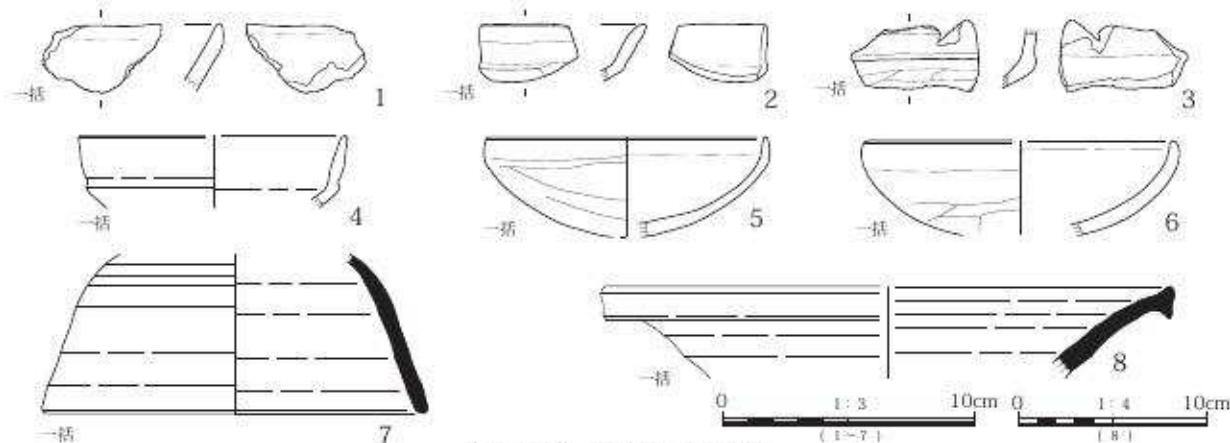
第7表 P-7 出土遺物観察表

No.	出土位置	種別	器種	部位	口径・底径・器高(cm)	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	P-7 覆土	土師器	壺	口縁部	—・—(1.9)	良好	橙	白色輕石	内外面丁寧なヨコナデ。	破片縦2.0 横3.3。

()残存値

調査区一括遺物

調査区一括遺物は遺構範囲外出土の遺物や調査区範囲内の表土や攪乱などから確認された遺物をまとめた。



第16図 調査区一括遺物

第8表 調査区一括 出土遺物観察表

No.	出土位置	種別	器種	部位	口径・底径・器高(cm)	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	調査区 一括	土師器	壺	口縁部	計測不可	良好	橙	良好	内外面ヨコナデ。	残存1/10。
2	調査区 一括	土師器	壺	口縁部	—・—・(2.4)	良好	橙	白色軽石粒	外面口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ。 内面ヨコナデ。	模倣壺。破片縦2.9 横4.0。
3	調査区 一括	土師器	壺	口縁～体部	—・—・(1.8)	良好	橙	精進	外面 口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ。 内面丁寧なナデ。	模倣壺。破片縦3.3 横5.0。
4	調査区 一括	土師器	壺	口縁部	<10.4>・—・(2.9)	良好	にふい 橙	良好 雲母	外面 ヨコナデ。内面丁寧なナデ。	模倣壺。残存1/10。
5	調査区 一括	土師器	壺	口縁～底部	<11.1>・—・(4.0)	良好	橙	砂粒含む	外面 口縁ヨコナデ 体部ヘラケズリ。 内面丁寧なナデ。	残存1/4。
6	調査区 一括	土師器	壺	口縁～体部	<12.0>・—・(3.7)	良好	橙	良好	外面 口縁ヨコナデ 体部ヘラケズリ。内 面丁寧なナデ。	残存1/4。
7	調査区 一括	須恵器	蓋	口縁～体部	<16.2>・—・(6.3)	不良 (焼錆 甘い)	灰白	不良	外面 天井部ヘラケズリ。内面丁寧な ヨコナデ。	口縁内外面に焼付着 H-1、No.10と接合か？残存1/8。
8	調査区 一括	須恵器	甕	口縁部	<30.0>・—・(4.8)	良好	灰	長石	内外面 ヨコナデ ロクロ目。	残存1/12。

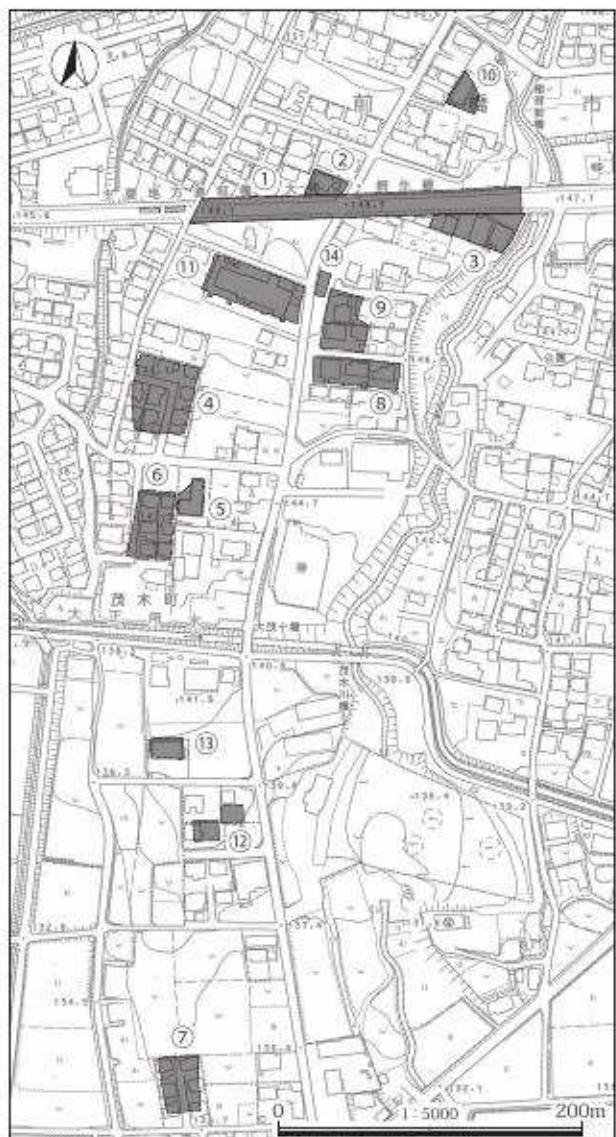
<>推定値 () 残存値

第V章 まとめ

天神風呂M地点遺跡の調査では狭い範囲であるが竪穴建物が3軒、掘立柱建物が1棟、竪穴遺構が1基、溝が2条、ピットが7基を確認した。今回これらの遺構からの遺物はH-1を除いては希薄であり年代ははっきりしない部分も多いが、おおよそ古墳時代前期から古代までの遺構が主であったと考えられる。

本遺跡のある天神風呂遺跡群は東西が谷となる台地上にあり、これまでに南北700m、東西200mの範囲内を天神風呂遺跡(各地点)で12回、また茂木諭訪東B地点遺跡などの調査が行われている(第17図)。これらの遺跡群では、縄文時代と古墳時代から奈良・平安時代に至る集落遺跡が確認されている(第9表)。さらにこの遺跡群からは瓦塔片や淨瓶などの仏教的な遺物(第18図)が確認され、寺院跡も想定されている。

今回の調査(M地点)は狭い範囲ではあるが、おおよそこの天神風呂遺跡群の中心部にある。遺構は古墳時代から古代が主体となり、竪穴建物と2×2間の庇を持つ掘立柱建物などがあり、おおむねこれまでに確認された他の地点と同様の傾向のある集落遺跡であった。ただし本地点においては、古墳時代前期の痕跡が確認された点が注目される。可能性がある遺構はH-2で、遺構の半分は調査区外で遺物も破片資料ではあるが、S字甕片や特殊器台などの古墳時代前期を示す資料が複数確認できた。古墳時代前期の遺構としては現在までに天神風呂遺跡内でH地点のH-10があるほか、周辺では(第2図)前橋東商業高等学校遺跡、下宮関遺跡、五十山遺跡C地点・D地点などがあり、散漫に分布する時期の痕跡が本地点で認められた。一方で、寺院跡が想定される本遺跡群であるが、本地点ではこの点を示す遺構、遺物は発見されなかった。



第17図 天神風呂遺跡群の各調査地点位置

第9表 天神風呂遺跡群の時期

番号	遺跡名	縄文	古墳	奈良	平安	文献・備考
①	天神風呂遺跡		○	○	○	A. 墓邊から瓦塔出土
②	天神風呂第2地点遺跡			○		C.
③	天神風呂A地点遺跡			○		C.
④	天神風呂D地点遺跡	○	○	○	○	C.
⑤	天神風呂E地点遺跡		○	○	○	C.
⑥	天神風呂F地点遺跡	○	○	○	○	C. 浄瓶(8世紀代)
⑦	天神風呂G地点遺跡	○		○	○	C.
⑧	天神風呂H地点遺跡	○	○	○	○	C. H-10(古墳時代前明)
⑨	天神風呂I地点遺跡	○	○	○	○	C.
⑩	天神風呂J地点遺跡	○	○	○	○	C.
⑪	天神風呂K地点遺跡	○	○	○	○	C.
⑫	天神風呂L地点遺跡	○	○	○	○	B.
⑬	茂木諏訪東B地点遺跡		○	○	○	C.
⑭	天神風呂M地点遺跡		○	○		本報告書

A.「天神風呂遺跡」1981

B.「天神風呂遺跡群」2006

C.「大胡遺跡要覧」2008



『天神風呂遺跡』1981で紹介された瓦塔片

*調査の為のプレハブ用地で確認された。(前橋市 粕川出土文化財管理センター所蔵)。そのほかに天神風呂遺跡出土とされる3片が『大胡町誌』1976に紹介されている。(さきたま史跡の博物館収蔵)



天神風呂F地点出土の淨瓶

(前橋市 粕川出土文化財管理センター)

第18図 参考資料(天神風呂遺跡群出土の瓦塔と淨瓶)

写真図版



1. 調査区全景 北から



2. 調査区全景 南から



1. 竪穴建物の切り合い 西から



2. H-1 完掘 西から



3. H-1 カマド遺物出土状況 東から



4. H-1 カマド 挖方 西から



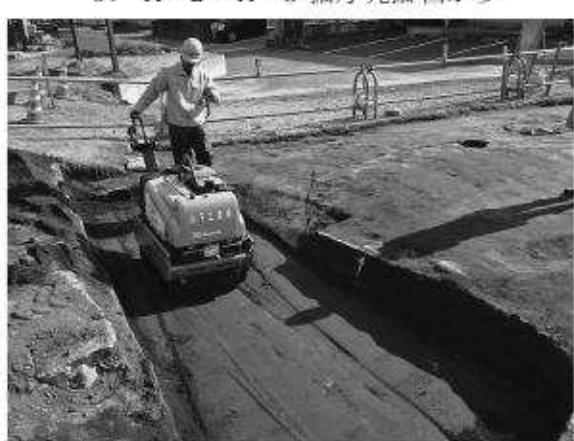
5. H-2・H-3 完掘 東から



6. H-2・H-3 挖方 完掘 西から



7. B-1 全景 西から



8. 調査埋め戻し 転圧作業

H - 1



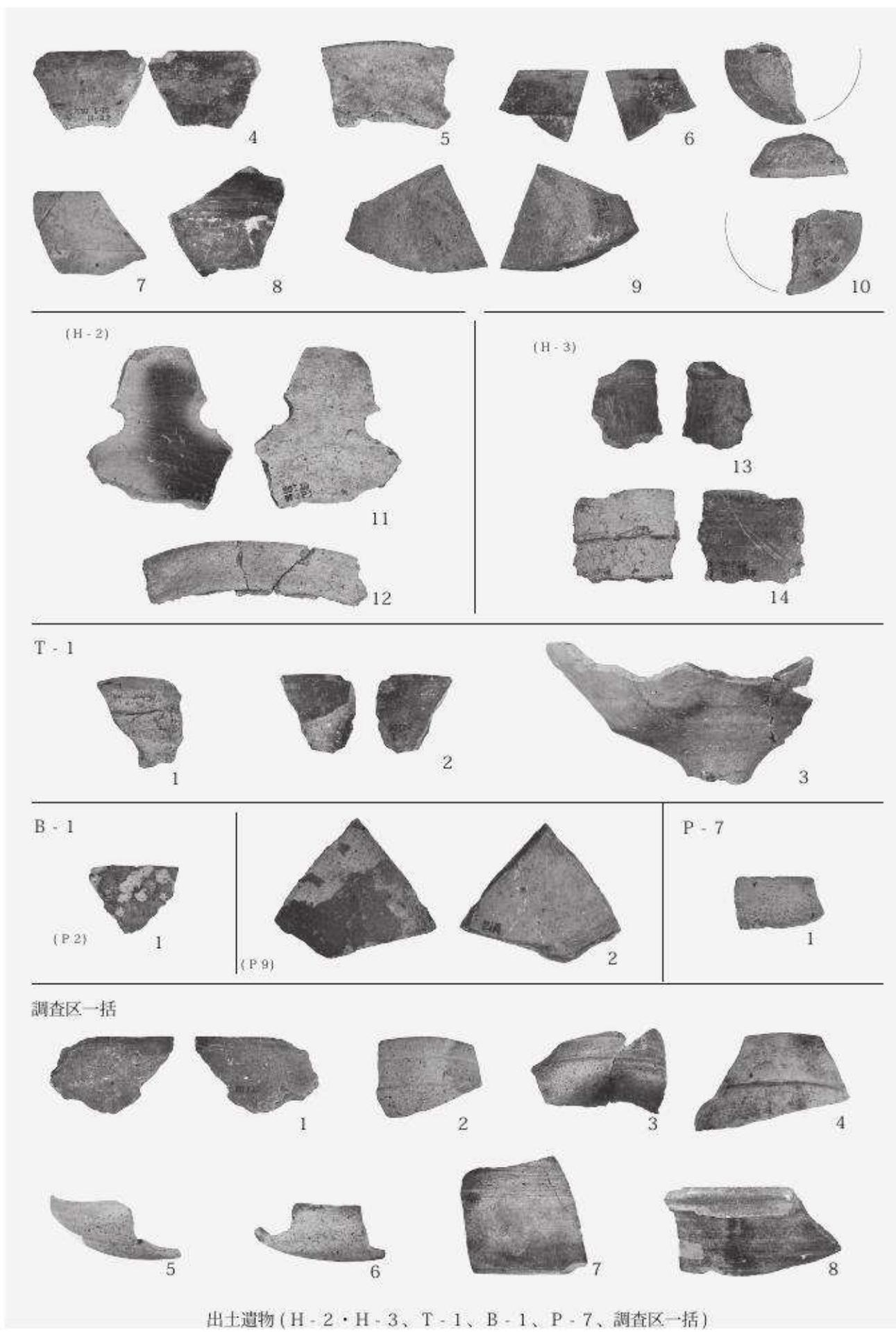
H - 2 • H - 3

(H - 2 • H - 3 瓦土)



出土遺物 (H - 1、H - 2 • H - 3)

図版 4



報告書抄録

ふりがな	てんじんぶろえむちでんいせき							
書名	天神風呂M地点遺跡							
副書名	市道 00-360 号線(大胡 110 号線)道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	青木利文・石塚久則・並木史一							
編集機関	山下工業株式会社 〒 371-0244 群馬県前橋市鼻毛石町 207-8							
発行機関	前橋市教育委員会 文化財保護課							
発行年月日	2019 年 3 月 27 日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
天神風呂 M 地点遺跡	群馬県前橋市浅木町 239-18 ほか	10201	0191 (30110)	36°24'35"	139°09'07"	2018.12.14 ～ 2018.12.27	177m ²	道路築造
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天神風呂 M 地点遺跡	集落跡	古墳時代 ～ 奈良時代	竪穴建物 掘立柱建物 竪穴遺構 ピット	3 軒 1 棟 1 基 7 基	土師器 壺・長胴甕 須恵器	天神風呂遺跡群の古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡の一部。 H-2 と H-3 からは古墳時代前期の土器片が確認された。 H-1 は長胴甕を組み合わせたカマドであり、4 個体の甕が復元できた。		

天神風呂M地点遺跡

—市道 00-360 号線(大胡 110 号線)道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2019 年 3 月 21 日 印刷

2019 年 3 月 27 日 発行

編 集 山下工業株式会社
発 行 前橋市教育委員会
印 刷 朝日印刷工業株式会社